＜博士論文要旨＞

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者（以下「中国語母語話者」とする）が書いた説明文と意見文、2 つの作文に出現する序列の接続表現の使用実態について調査・記述し、その特徴と問題点を、日本語母語話者との比較を通して分析・考察したものである。全 7 章からなる。

第 1 章では、本論文の研究目的と研究対象を選択した理由を述べ、本論文の各章の構成を紹介した。

本論文の研究目的として、日本語母語話者と中国語母語話者の序列の接続表現を選択した理由は次の通りである。

長い文章を書こうとするとき、複雑な内容をわかりやすく整理するために、「まず」「第一に」などいった序列の接続表現は、日本語母語話者、日本語学習者を問わず、よく使われる。

しかし、これら一見簡単そうに見える序列の接続表現を日本語学習者が用いて、実際に文章を書くと、その選択や組み合わせなどの問題で、文章の構造が読者にうまく伝わらないことが少なくない。そこで、本研究では、中国語母語話者の序列の接続表現の使い方を取り上げ、日本語母語話者との比較の中で、その使用上の類似点と相違点を分析・考察することにした。

一方、本論文の研究対象として、特に序列の接続表現を選択した理由として、次の三つを示した。

第一の理由は、序列の接続表現がアカデミック・ライティングの分野で重要な役割を果たしているからである。

第二の理由は、日本語学習者の作文において序列の接続表現の誤用が多く見られるからである。

第三の理由は、序列の接続表現の選択に失敗すると、読み手が文章の全体構造を把握するのに支障を来すからである。

第 2 章では、序列の接続表現に関する先行研究を 4 つの観点に分けて紹介した。

第一の観点は、序列の接続表現の品詞的側面である。日本語学の視点から、序列の接続表現が接続詞として扱われているのか、それとも副詞として扱われているのかについて論じた。

第二の観点は、連接と構造である。中国語の文と句の連接と、日本語の文と句の連接の特徴について述べ、文章構造の観点からは、序列の接続表現を含む文章はどのように構成されているのかを論じたものを紹介した。

第三の観点は、第二言語習得研究である。第二言語習得研究の定義、研究方法に関しては、迫田（2002）を参照にしながら、量的研究と横断的研究を中心に調査を行い、序列の接続表現の使用状況を分析していくという本論文の立場を述べた。

また、日本語教育における接続表現の使用に関する研究としては、一般的な研究と、「そして」「それから」に関する研究の二つに分けて紹介した。

そして、先行研究の第四の観点は、作文評価である。具体的には、日本語学習者の作文に対する日本語母語話者の評価を調査した先行研究を取り上げた。

第 3 章では、研究の方法と調査資料などについて紹介した。

本論文では、序列の接続表現が出やすいジャンルとして、説明文と意見文に分けて調査を行った。説明文では「料理の作り方」をテーマに、意見文では「割り勘の賛否」をテーマにそれぞれ設定した。

その理由は、誰もが経験のある身近なテーマが望ましいと考えたためである。また、「料理の作り方」は、自分が知っていて相手が知らない内容を正確に伝えるという説明文の基本的な性格を、「割り勘の賛否」は、自分と立場を異にする相手に根拠を示しながら主張するという意見文の基本的な性格を備えており、パイロット調査の結果、この二つのテーマが比較的安定して序列の接続表現が表れた点も選択の理由になっている。

調査目的は、手順を表す説明文と、自分の意見を述べる意見文、二つ異なるジャンルの文章を書くとき、日本語母語話者と中国語母語話者は実際にどのような序列の接続表現を使用しているのか、それぞれどのような類似点と相違点があるのかを明らかにすることである。

調査対象者は、「料理の作り方」「割り勘の賛否」というそれぞれのテーマに対し、日本語母語話者と中国語母語話者、各 70 名である。日本語母語話者は日本国内の大学に在籍し、文系学部に所属する学部 2 年～4 年生で、中国語母語話者は中国国内の大学に在籍し、日本語を専攻する学部 2 年～4 年生である。中国語母語話者の学習歴を確認し、旧日本語能力試験で 2 級の目安とされている学習時間 600 時間以上の授業時間を経ている学習者のみを対象とした。

調査方法は、説明文と意見文と同様に、同一のテーマについて、日本語母語話者に

は日本語で、中国語母語話者には日本語と中国語で作文を書いてもらうという形を取った。なお、中国語と日本語、どちらを先に書くかについては、特に指示はせず、中国語母語話者それぞれの判断に委ねた。作文は手書きで、制限時間は設けていない。

調査の指示は、説明文は、「あなたの得意料理、または、得意とは言えなくても作ることができる料理の作り方を書いてください。」とし、意見文は、「親しい友達と 2 人で一緒に食事に行きました。会計をするとき、その友達が『割り勘にしない？』と言いました。そのとき、あなたはどうしますか。割り勘に同意しますか。それとも、自分がおごる、または相手におごってもらうように提案しますか。『割り勘』か『おごる（おごってもらう）』かのどちらかを選び、その理由を書いてください。」とした。

また、作文の注意点として「料理の作り方」では、その料理を作ったことがない人が作ってみたくなるように、また確実に作れるように書くこと、「割り勘」では、人間関係を自由に設定してよいこと、理由はかならず三つ以上列挙することを伝えた。また、両テーマとも 600 字以内で書くこと、中国語母語話者の場合は日本語と中国語の両方で書くこと、丸数字などを使った列挙は避け、文章で書くことを補足的に指示した。

第 4 章では、説明文における中国語母語話者の序列の接続表現の選択について、日本語母語話者との比較を通じて、それぞれの類似点と相違点を分析・考察した。

料理の作り方の手順の最初の段階と最後の段階を説明する場合、日本語母語話者と中国語母語話者の作文に現われる序列の接続表現の選択は比較的似た傾向があり、「まず」と「最後に」が最も多く使用されていた。しかし、調理の途中の段階を説明する場合、日本語母語話者は「次に」、中国語母語話者は「それから」を最も多く使用し、それぞれ選択した接続表現に異なる傾向が見られた。

また、同じテーマについて中国語で書いた作文との比較を通して、中国語母語話者の日本語作文に出てきた接続表現の選択の特徴は、学習者の母語である中国語と密接な関係があることが示唆された。

第 5 章では、第 4 章と同様に、日本語母語話者の作文と対照しながら、意見文における中国語母語話者の序列の接続表現の特徴を明らかにした。

日本語母語話者は「一つ目」系列と「第一」系列という組み合わせを多く使用していたのに対し、中国語母語話者は「一つ目」系列と「第一」系列をあまり使用せず、主に「まず」系列を使用していた。つまり、日本語母語話者は、ジャン

ルによって序列の接続表現の系列を変えたのに対し、中国語母語話者はジャンルに関わらず同じ系列を選択していたことがわかった。

また、中国語母語話者の作文の中に出てきた序列の接続表現の系列選択は、中国国内で使用されている日本語教科書の影響だけでなく、同じテーマで書かれた母語による作文との比較検討の結果、母語である中国語の影響を受けていることが示唆された。

第 6 章では、第 4 章と第 5 章の調査結果に基づいて、大学院で日本語学を専攻し、現在、教壇に立っている日本語を母語とする日本語教師 3 名が、今回収集した説明文と意見文を 5 段階で評価し、中国語母語話者の作文における序列の接続表現の使用に果たして問題があるのか、問題があるとすればどこにあるのか、その背後にある原因を探った。

作文の評価を集計した結果、すべての項目で中国語母語話者は日本語母語話者の総合平均を下回っており、その最大の問題点は、説明文、意見文ともに、文章の全体的な構造がわかりにくい点にあることがわかった。

そして、その背景には、選択された序列の接続表現の文法面での不適切さを筆頭に、序列の接続表現の形態に対する母語の干渉、序列の接続表現の出現位置やその組み合わせ、さらには序列の接続表現によって導かれる内容の対等性や、列挙の予告が不十分であるといった要因が絡み合い、読み手の文章理解を阻害している姿が明らかになった。

また、説明文より意見文の方が全体としての評価が低かった。日本語母語話者は説明文では「まず」系列の序列の接続表現を使用する一方、意見文では「第一」「一つ目」のような数字の入った序列の接続表現を使うことが多い。しかし、中国人日本語学習者の作文では、説明文でも意見文でも同じように「まず」系列の接続表現を使用する傾向が強い。こうした評価の背景には、序列の接続表現は文章のジャンルによって切り替えたほうが読みやすいにもかかわらず、学習者の場合、既習の序列の接続表現の組み合わせの型をどのジャンルにも当てはめる傾向が強く、それが、読者の文章の全体構造の把握を妨げる恐れがあることが示唆された。

第 7 章では、本論文のまとめとして、本論文の結論と残された課題を述べた。

本論文の結論は、上記の第 4 章、第 5 章と第 6 章の内容の通りである。

一方、残された最大の課題は、中国語以外を母語とする日本語学習者との対照研究である。また、本論文では、中国語母語話者の作文の構造について、序列の接続表現に限って考察した。しかし、序列の接続表現に現れない作文の構造はどうなっているのか、また、その構造は文章理解にどのような影響を与えるのかについては分析していない。それらの点については、今後の課題としたい。